

# OKADA-ROOM Vol.3

岡田三郎助とゆかりの画家たち—前期

会期 2015年12月18日(金)~2016年2月28日(日)

「OKADA-ROOM」では、平成27年冬から28年春にかけて、岡田三郎助にゆかりのある画家たちの作品を、前期（Vol. 3、平成27年12月~28年2月）・後期（Vol. 4、平成28年3月~）の二部に分けてご紹介します。

岡田が洋画家への道を志した明治時代初頭は、洋画の技法や理念を学ぶことができる場が国内にまだ十分にはありませんでした。しかし美術教育の制度が徐々にととのえられるとともに、国内初の公募展である文展（文部省美術展覧会）も誕生し、美術家たちは競って展覧会へ出品するなど互いに創作に励んでいました。岡田の美しい色彩や典雅な画風もまた、尊敬すべき同郷の先輩や、同じ夢を抱いて集った仲間たちとの親交から刺激を受けて磨かれたといえます。

今期では、若き岡田三郎助を洋画家の道へ導いた百武兼行や小代為重、黒田清輝、久米桂一郎らの偉大な先達たちや、岡田とともに近代の日本洋画壇を牽引した藤島武二の作品を、岡田の代表作と併せて展示します。

## 出品目録

1	田子の浦図	View of Tagonoura bay	百武兼行	1876（明治9）	55.8×40.5	油彩・カンヴァス	個人蔵
---	-------	--------------------------	------	-----------	-----------	----------	-----

### イギリスで描かれた、ノスタルジックな日本の風景

百武が渡英し、風景画家リチャードソンのもとで本格的に油彩画を学びはじめて約1年後の作品。遙か後方に富士山が見え、湖面には夕映えの空が鏡のように映り込んで、画面に広がりとお興行きを感じられる。岡田三郎助は、この時期の百武について「田子の浦の絵を描いてローヤル・アカデミーに出したりして好評を得た」と述べており、おそらく本作がその絵にあたるだろうと考えられる。

2	少女像	Portrait of a girl	百武兼行	1881（明治14）	46.0×37.0	油彩・カンヴァス	館蔵 黒田吉男氏寄贈
---	-----	--------------------	------	------------	-----------	----------	---------------

### 小首をかき上げた褐色の瞳の少女

イギリス・フランスで油画を学んだ百武は1881（明治14）年に三度目の渡欧を果たし、多忙な外交官の仕事の傍ら、イタリア・王立ローマ美術学校の名誉教授、チェザーレ・マッカリに師事し画技を磨く。本作はこの頃に描かれた作品。画面は茶系の色調で統一され、静かな安定感を生み出している。

わずかに首をかき上げる少女は、微笑んでいるような澄ましているような不思議な表情をしている。

### 百武兼行（ひやくたけ・かねゆき、1842~1884）

現在の佐賀市片田江に生まれる。1871（明治4）年からの鍋島直大なべしま なおひろ（第11代佐賀藩主）のヨーロッパ巡遊に随行し油彩画に出会い、のちロンドン、パリ、ローマで本格的に学ぶ。本職は外交官であったが、いち早く西洋で油彩画を学んだ日本洋画界のパイオニアの一人として知られる。

岡田三郎助は幼い頃に百武の描いた油彩画を見て大きな衝撃を受け、この経験が「子供心にも強い決心をつけさせる重要な動機」となり、洋画家としての自分の一生を決定づけた、と語っている。

### 洋画家への一步を刻んだ、岡田の初期の労作

堀江正章ほりえ まさあきが主宰する画塾「大幸館」たいこうかんの卒業制作として描かれた、岡田25歳の頃の作品。まだ旧来の暗い色遣いが画面を支配してはいるが、老人の腰あたりの陰影のつけ方に、師より学んだ色の配置の工夫がみられる。のちに岡田は、初めて堀江のもとで本格的な色彩の表現を学び、これが後に黒田清輝らのもたらした新しい画風を理解するのに役立った、と回想している。

### 4 日傘の婦人のいる風景

Scene with a woman  
under the parasol

小代為重

1890（明治23）

42.8×33.5

油彩・板

館蔵

#### 日常の風景を切り取った佳作

湧き立つ入道雲の下、女性が日傘をさして出かけていく。戸口の人物は彼女を見送っているようである。日常の一場面を生き活きとした筆致で描いた本作は、時を超えて当時の人々の息遣いをも伝える。本作は小代が黒田らと白馬会を興す以前に、明治美術会で活躍していた時期の作品。《少女像》と比べると、やや暗めの色調とはっきりした輪郭線で描かれており、初期の小代の画風をよく伝える一枚である。

### 5 少女像(房州海岸にて)

Portrait of a girl  
(At Boshu bay)

小代為重

1897（明治30）

33.4×24.2

油彩・カンヴァス

館蔵

#### みずみずしい少女の横顔

パステル調の色彩と輪郭線をぼかした柔らかいタッチが印象的な一品。初々しい少女の表情や肌を丹念に描いており、画家が人物の表現に高い関心を抱いていたことがうかがえる。着物の白が杭の間からのぞく湖面の色と響きあい、画面に独特の爽やかさを与えている。

当時の房州は避暑地として人気があり、白馬会系の画家たちがたびたび訪れていた。

#### 小代為重(しょうだい・ためしげ、1861～1951)

佐賀に生まれる。旧姓は中野で、岡田三郎助の母方の遠縁にあたる。千葉師範学校の教員を務めながら、百武兼行から油彩を学び、1885(明治18)年からは工部大学で建築装飾を教える。油彩画を学ぼうと決心した少年時代の岡田にとってよき相談相手だったようで、曾山幸彦そやま さちひこの画塾を紹介するなどの援助をしている。

明治美術会や白馬会創設に携わるなど洋画家としても活躍したが、本来は機械工学の専門家を自認しており、東京電信学校では機械製図を教授するなど、多才な人であった。

### 6 小代為重像

Portrait of  
Tameshige Syodai

黒田清輝

1897（明治30）

25.3×18.0

油彩・カンヴァス

館蔵

#### 画家同士の親しい交友を伝える

右下に「明治三十年六月六日箱根湯本萬翠楼ニテ寫ス 黒田清輝」とある。1897(明治30)年6月5日、黒田は小代為重、久米桂一郎ら白馬会の仲間と箱根へ出発しており、本作はこの旅行の際に描かれたものであろう。小代は黒田より5歳年上であるが、白馬会を創設した仲間同士、気心の知れた相手だったようだ。スケッチ的な作品だが、闊達なタッチで的確に小代の風貌をとらえている。

### 7 画室内

In the atelier

黒田清輝

1889（明治22）

40.7×32.0

油彩・カンヴァス

館蔵

#### 若き黒田が暮らしたパリのアトリエの情景

フランス・アカデミーの画家、ラファエル・コランのもとで洋画を修めるべく、同い年の久米桂一郎らとパリで共同生活を送っていた時期に描かれた作品。黒田の作品にしては渋い色味であるが、壁にかかる影やストーブの排気管などに、室内の柔らかな光が絶妙に表現されている。当時の留学生たちの普通の暮らしを垣間見ることのできる点でも貴重な作例である。

## 黒田清輝(くろだ・せいき、1866～1924)

「今まで脂(やに)っぽい暗い繪の中にあつた私は、黒田師に接して急に明るみに出たやうな氣がして來た。」(岡田三郎助「平凡なる私の修業時代」)

1889(明治27)年、岡田は黒田清輝を知り、彼や久米桂一郎を通じて外光表現を積極的に受け入れていく。

黒田は1884(明治17)年に法律を学ぶためフランスに渡るも、画家になることを決意。帰国後は白馬会や東京美術学校で主導的な役割を担いながら、外光表現やヨーロッパの伝統的な絵画観の導入に務めた。

## 8 子供のいる風景

Scene with a child

久米桂一郎

1895(明治28)

45.3×60.5

油彩・カンヴァス

館蔵

### 留学の成果が開花した一品

久米29歳のとき、フランス留学から帰国した2年後に京都を旅行した際に描かれた作品。葉の間から差す光や足元の木洩れ日を点描的に表現し、明るい陽光を捉えることに特に心を砕いている様子がうかがえる。いっぽう、影は平坦な柔らかいタッチで明るい部分と描き分けられており、自然のなかの光の表現を得意とした師・コランから受けた薫陶がよく表れている。

## 久米桂一郎(くめ・けいいちろう、1866～1934)

佐賀に生まれる。父は歴史学者の久米邦武。岡田三郎助とは母方の遠縁にあたり、生家ははず向かいであった。1886(明治19)年に渡仏し、ラファエル・コラン門下に入り黒田清輝を知る。帰国後は黒田と画塾を開き、白馬会結成に携わった。岡田と帰国後間もない黒田を引き合わせたのは久米であり、岡田の画業の一大転換は彼によってもたらされたといえる。東京美術学校の西洋画科では、解剖学や西洋考古学などの授業を担当。その後画作からは遠ざかり、美術教育者として活躍した。

## 9 大磯風景

Scene of Oiso

岡田三郎助

1894(明治27)

35.9×25.3

油彩・板

館蔵

### ターニングポイントの時期に描かれた作品

神奈川県の大磯に取材した作品。岡田は本作を制作した1894(明治27)年に初めて黒田清輝を知り、その明るい画風に大きく影響されるが、本作はその感化を受ける以前の作例といえる。

右下の書き入れから、画家がのち1937(昭和12)年に文化勲章を受けたおりに、受章記念として父方の石尾家へ贈呈した作品であると考えられ、とりわけ思い入れのあった一枚と思われる。

## 10 西洋婦人像

Portrait of a Woman

岡田三郎助

1900(明治33)

45.4×37.9

油彩・カンヴァス

館蔵

### 光の生み出す色彩を追って

黒田がパリの土を踏んでから13年後の1897(明治30)年、岡田もまたフランスに渡り、黒田・久米のかつての師・コランのもとで学び始めた。留学3年目に描かれた本作はいまだ硬い描写を残しながらも、髪や額に当たる光の柔らかなタッチに、外光表現への関心の高まりを感じさせる。岡田は本作の2年前にも同じ女性の肖像画を描いており、師のもとで同じ画題に何度か挑戦し、研鑽を積んだことがわかる。

## 11 裸婦

Nude

藤島武二

大正時代

60.4×50.0

油彩・カンヴァス

館蔵

### パレットナイフを使った、実験意欲旺盛な作品

絵具が面的に配置された女性の肌は、パレットナイフを使った素早いタッチで描かれている。一見荒々しい画面だが、女性の力強さをよく捉えている。また、女性の髪などに使われた黒い絵具も、上気したような肌の紅色を巧みに引き立たせている。藤島のこのような実験的な筆触は、『イタリアの海』(石橋財団石橋美術館蔵)など、明治後期のヨーロッパ留学時代の作例にも見出すことができる。

12	蘇州河激戦の跡 (エスキース)	Ruins of fierce battle, Suchou	藤島武二	1938(昭和13)	41.0×53.0	油彩・カンヴァス	館蔵
----	--------------------	-----------------------------------	------	------------	-----------	----------	----

### 当時の不穏な政情を示す、未完作の下絵

1938(昭和13)年、藤島は第一回満洲國美術展覧会の審査員として満州に招かれた。本作はおそらくその帰途に蘇州に赴いた際のスケッチに基づくもので、翌年、第1回聖戦美術展覧会に審査員作品として出品された未完の作品(笠間日動美術館蔵)の準備作にあたる。

戦争にかかわる題材だが、描写は一般的な戦争画とは異なり、寂寞とした雰囲気を与える。

### 藤島武二(ふじしま・たけじ、1867～1943)

岡田三郎助とともに日本の近代洋画壇で大きな存在感を発揮した画家。東京美術学校の西洋画科新設の際には岡田とともに助教授となり、のち共同で本郷洋画研究所を設立。さらに第1回の文化勲章とともに受章し、二人は「画壇の双璧」とも呼ばれた。

岡田への追悼文では「上品さが何を描いてもついて廻つてゐた」と岡田の作品を評しつつ、その人柄を「非常に私の強い人」とも称しており、外柔内剛とも称された岡田のひとつなりを知悉していた様子がうかがえる。

13	花野	Field of flowers	岡田三郎助	1917(大正6)	65.2×90.8	油彩・カンヴァス	館蔵
----	----	------------------	-------	-----------	-----------	----------	----

### 師ラファエル・コランへのオマージュ

岡田は生前から、ラファエル・コランに師事した日本人画家の中でもその作風を最もよく受け継いだ画家と評されていた。本作はコラン没後の翌年に描かれたもので、草上に横たわる裸婦を描いたコランの作品《花月(フロリアル)》(パリ・アラス美術館蔵)などが連想される。本作は画家にとって師コランへ捧げるオマージュであったのかもしれない。第11回文部省美術展覧会に出品。

14	薊	Thistles	岡田三郎助	1908(明治41)	60.7×45.5	油彩・カンヴァス	館蔵
----	---	----------	-------	------------	-----------	----------	----

### 深い緑色の諧調が見どころ

第12回白馬会展への出品作。読書中に物思いにふける情景であろうか。女性の背後にはアザミやキキョウが見え、秋の一コマであることがうかがえる。背景、着物、帯ともに緑色で統一されているが、それぞれ異なる色調に描き分けられており、岡田の色に対する非常に鋭敏な感覚を見て取ることができる。

この時期、画家は画面一杯を覆う植物の背景と着物をまとった女性の取り合わせを好んで画題とした。

15	裸婦	Nude	岡田三郎助	1935(昭和10)	99.8×65.5	油彩・カンヴァス	館蔵 佐賀県重要文化財
----	----	------	-------	------------	-----------	----------	----------------

### 円熟期を迎えた岡田晩年の傑作

岡田67歳、1935(昭和10)年の第二部会展に出品された作品。当時の新聞では「今までの帝展よりもつと力瘤を入れた作品」(報知新聞)などと評され、早くより名作の呼び声が高かったとみられる。展覧会後は朝鮮の李王家が所蔵し、旧李王家美術館(現在の徳寿宮美術館、ソウル市)に飾られたが、1940(昭和15)年の岡田の遺作展に出品されたのちは、一般に公開されることがなかった。

16	岡田三郎助愛用の絵具箱					木製	館蔵
----	-------------	--	--	--	--	----	----

佐賀県立美術館

〒840-0041 佐賀県佐賀市内1-15-23  
TEL. 0952-24-3947 FAX. 0952-25-7006

E-mail. hakubutsukan-bijutsukan@pref.saga.lg.jp Web. <http://saga-museum.jp/museum/>